



部活動の活動方針

銚子市立銚子西中学校

校長名 野尻 孝

教育目標 及び 部活動の 意義	1 学校教育目標 「郷土を愛し、未来をたくましく生き抜く生徒の育成」 2 部活動の教育的意義 部活動は、知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育む大切な機会である。そして部活動を通して、子供たちが充実した学校生活を送り、未来をたくましく生き抜く力が備わることに期待している。 また、部活動の教育的意義は技能や体力の向上はもちろんのこと、コミュニケーション能力、自己肯定感、規範意識、礼儀やマナー、表現力（言葉遣い）、忍耐力、協調性、課題解決能力など、様々な教育的効果を有している。
部活動の 基本方針	1 部活動の基本方針 活動を通して、個人の心技体の向上とチーム、個人の勝利や作品の完成を目標とし、人としての成長（物事の取り組み方、人との接し方）を目的として行う。 2 適切な指導 (1) 校長及び部活動顧問は、生徒の心身の健康管理や事故防止に万全を尽くすとともに、体罰やハラスメントの根絶を徹底する。 (2) 運動部顧問は、次のことを配慮し指導を行う。 ア スポーツ医・科学の見地から、トレーニング効果を高めるために、休養を適切に取らせる。 イ 過度の練習はスポーツ障害や外傷のリスクを高めてしまうこと等を正しく理解する。 ウ 生涯にわたってスポーツに親しむ基礎を培うことができるよう、生徒の自主性・自律性を尊重し、生徒とのコミュニケーションを十分に図り、生徒がバーンアウトすることなく活動が続けていけるよう留意する。 エ 科学的トレーニングの積極的な導入等により、短時間で効果が得られる合理的でかつ効率的な指導を行うことができるよう努める。併せて、発達の個人差や女子の成長期における体と心の状態等に関する正しい知識を身に付けることに努める。 3 活動時間及び休養日の設定 成長期にある生徒が、運動、食事、休養及び睡眠のバランスのとれた生活を送ることができるよう、以下の基準を定める。 (1) 適切な活動時間 長くとも平日の活動時間は2時間程度とし、土曜日及び日曜日（以下「週末」という。）を含む学校の休業日は3時間程度とする。 (2) 休養日の設定 ア 学期中は、平日（木曜日）に1日、週末（土・日）に1日以上、少なくとも週当たり2日以上休養日を設定する。週末に大会等に参加した場合は、他の日に休養日を振り替える。

イ 長期休業中、平日は、学期休養日の設定に準じた扱いとし、週末は、原則、休養日とする。なお、生徒が十分な休養を取ることができるよう、まとまった休養期間を設ける。

ウ 原則として、定期試験開始日の3日前から終了までの期間は休養日とする。

4 事故防止及び健康管理

けがや事故を防ぐために、次のことに留意する。

(1) 健康管理

ア 各生徒の発達段階や体力、技術の習得状況等を把握し、生徒にとって無理のない練習となるよう留意するとともに、その日の環境条件や生徒の体調等の確認を行う。

イ 体調等に不安のある生徒が、顧問に申告できないことがないように、日頃から、顧問に申告できる体制及び雰囲気づくりに努める。

ウ 熱中症への予防のため、気温・湿度などの環境条件に配慮した運動実践や、こまめに水分を補給し休憩を取ること、生徒への健康観察など健康管理を適宜行う。

エ 感染性胃腸炎及びインフルエンザ等の感染症対策を十分にとって活動する。

(2) 施設・設備の点検

ア 法律で義務づけられた施設や設備の定期的な安全点検以外に、日常的な安全確認や点検に努める。特に、活動前に、使用する施設・設備の点検を行うとともに、生徒にも安全確認を指導し、事故の未然防止に努める。

イ 顧問は、部として施設や用具を大切にすることを意識を高め、小さな不備も見落とさない視点を生徒に養成するとともに、施設・設備や用具の管理には十分努める。

(3) 校外での活動時における安全

学校外で活動する場合、次のことに留意する。

ア 学校外で活動したり、大会等で学校外の場所へ移動する際の安全指導は、あらかじめ部員全員に徹底する。

イ 学校外で活動する際、顧問もしくは代わりに責任を持てる者がつき、生徒だけで活動することはしない。

ウ 活動場所の安全点検や時間帯・人数・運動量等に配慮する。

5 その他

(1) 複数校の生徒による合同部活動等の取組

部員数によっては、複数校の生徒による合同部活動等の取組も検討し、活動の機会が損なわれることがないようにする。

(2) 保護者との連携

部活動を運営するに当たり、年度当初、保護者会を設定する。必要に応じて、保護者の意見を聞いたり、顧問の考えを伝える場を設ける。

なお、遠征や物品の購入等に当たり、保護者から預かった必要経費の説明は必ず行う。

(3) 外部団体との連携

銚子市スポーツ協会をはじめとする各種関係団体との連携を密にするとともに、外部指導者の活用を進めるなどして、学校と地域が協働できる環境を整えていく。